

こどもの病気対策法①27

—日本脳炎—

小宅医院 小宅民子

日本脳炎は、蚊に刺されて感染する病気です。日本脳炎ウイルスは主にブタの体内で増殖し、そのブタを刺した蚊が感染、その蚊を介してヒトに感染します。世界では毎年3万〜4万人の報告がありますが、日本ではワクチンの普及や生活環境の改善により年間発症数は10人以下です。

日本脳炎に感染した蚊に刺されても必ず発症するとは限りません。多くの人はほとんど症状がなく、100人〜1000人に一人が日本脳炎を発症するといわれています。しかし日本脳炎を発症すると死亡率は20〜40%、回復しても半数以上に重い後遺症が残ります。有効な治療法はなく、ワクチンによる予防が重要です。

小児の日本脳炎発症は、2006年から2015年の間、熊本県で3歳児、7歳児、高知県で1歳児、山口県で6歳児、沖縄県で1歳児、福岡県で10歳児、兵庫県で5歳児でした。千葉県では2015年に生後11か月の乳児が感染

し、重い後遺症が残ったと報告されました。

西日本、特に九州、四国はブタの日本脳炎抗体保有率が高く(感染しているブタが多く)、発症リスクが高い地域です。また3歳以下の報告例もみられます。日本小児科学会は日本脳炎流行地域に渡航・滞在する小児、最近日本脳炎患者が発生した地域、ブタの日本脳炎抗体保有率が高い地域に居住する小児に対しては、生後6か月から日本脳炎ワクチンの接種を開始することを推奨しています。

従来、日本脳炎ワクチンの標準的接種時期は、3歳からといわれていました。しかし、生後6か月以上であればいつでも接種可能です。ワクチンの接種量は、3歳未満で0・25 ml、3歳以上で0・5 mlです。3歳未満の接種量は少ないですが免疫の獲得に差はないとされています。日本脳炎をより確実に予防するために生後6か月からワクチンを接種しましょう。

日本脳炎の5つのポイント

- ・感染したブタを蚊が刺し、その蚊を介してヒトに感染する。
- ・死亡率は20〜40%、回復しても後遺症が残ることが多い。
- ・有効な治療法がなく、ワクチンによる予防が重要。
- ・3歳以下の発症例もあり、九州は発症リスクが高い地域。
- ・リスクが高い地域では、生後6か月からの予防接種が推奨されている。

